

平成 26 年度 国際研究発表奨励金 受領報告書

白井史人（東京大学博士課程・東日本支部）

### 〈発表学会について〉

国際シンポジウム：Hollywood's musical Contemporaries & Competitors in the early Sound Film Era

日時：2014 年 7 月 26 日～28 日

場所：イギリス、ギルドフォード、サリー大学・アイヴィー芸術センター

（[http://www.surrey.ac.uk/schoolofarts/news/events/2014/hollywoods\\_musical\\_contemporaries\\_and\\_competitors\\_in\\_the\\_early\\_sound\\_film\\_era\\_conference.htm](http://www.surrey.ac.uk/schoolofarts/news/events/2014/hollywoods_musical_contemporaries_and_competitors_in_the_early_sound_film_era_conference.htm)、最終アクセス 2014 年 10 月 17 日）

発表題目：The Heterogeneity of Early Japanese Sound-Film Music in the Modernism Culture of the early 1930s: *A Madame and a Wife* (1931) and *One Million Chorus* (1935)

### シンポジウム概要：

奨励金の助成を受け、上記シンポジウムにて発表を行った。当シンポジウムは、サリー大学に勤める Jeremy Barham 氏が企画・運営したものである。1920 年代半ばから 30 年代初頭にかけてのサイレント映画からトーキー映画への移行期の音響・音楽に関しては、これまでハリウッドを中心としたアメリカの事例が主たる対象となってきた。その成果を参照しつつ、ハリウッド以外での同時期の実践の広がりをも美的・技術的・社会的側面から検討することがシンポジウムの目的である。

*Settling the Score: Music and the Classical Hollywood Film* (The University of Wisconsin Press, 1992) を著している Kathryn Kalinak 氏を基調講演者に迎え、38 名の研究者による発表が行われた。対象作品の製作国はオランダ、スウェーデン、イタリア、イギリス、中国、日本、ドイツ、インド、メキシコ、アルゼンチン、ブラジル、ロシア、リトアニア、アメリカ、ブラジル、スペイン、フランス、ギリシャ、エジプト、オーストラリアの 20 カ国である（発表順）。アフリカを除く世界各地の事例を含む地域的多様性を持つ構成となった。

ほぼ全ての発表が同一の会場で行われ、夜には映画の上映会（26 日、映画『青い光』、27 日サイレント映画『吸血鬼』のライブ伴奏付き上映）も催された。発表者にはキャンパス内の宿舎が有料で提供され、会場での昼食やキャンパス近くでの夕食には参加者のほとんどが参加するなど、密な意見交換を行う環境が整っていた。

### 〈研究発表要旨〉

報告者は、27 日に行われた発表セッション 4 において上記題目の発表を行った（邦訳：1930 年代のモダニズム文化のなかでの日本初期トーキー映画の音楽の混交性——『マダム

と女房』(1931)と『百万人の合唱』(1935))。当セッションは日本とインドの事例に関するもので、同セッションの Doehring 氏は『一人息子』(監督：小津安二郎、1936年)を対象とする発表を行った。報告者は、初期トーキー映画の代表である『マダムと女房』(監督：五所平之助)と、1935年に公開された『百万人の合唱』(監督：富岡敦雄、製作：J.O.スタジオ、作・編曲：飯田信夫)を取りあげた。

商業的な側面が強く批評家から酷評されてきた『百万人の合唱』を主たる分析対象としたのは、これまでの海外での日本映画の音響・音楽研究における対象選択の偏り——黒澤明、溝口健二、小津安二郎らの著名監督の作品への集中——を勘案したからである。本作は歌手の徳山璉が主演し、劇中に藤山一郎ら著名歌手の歌唱場面を取り入れた音楽劇としての性格も持っている。その音響・音楽面において、サイレントからトーキーへの移行期におけるハリウッドを中心とした手法への標準化と地域的特化の二つの傾向の共存という過渡期の特徴が明確に表れている点に着目した。

まず、理論的枠組みとして映像分析を主とした日本映画研究で用いられている「ヴァナキュラー・モダニズム」(Miriam Bratu Hansen)という概念を援用した。この概念は、ポピュラー／シリアスの二分法に捉われない地域特有の偏差へ注意を向けるもので、映画の音響・音楽の分析にも有効である。さらに、トーキー映画における実践の背景として、無声映画の伴奏と伝統的舞台芸術との関連や、海外の事例などを参照し標準化していく試みを、先行研究を踏まえて紹介した。

次に、国産技術を使用し「日本初の本格的トーキー」とされてきた『マダムと女房』(1931)の音響・音楽の用法に、トーキー技術そのものへ自己言及する効果が見られる点を指摘した。特に、映画の末尾で主人公が妻に愛を告白する場面に着目し、口の動きのみが示される無声映像となるよう演出され、移行期のメディア技術の差を用いて、無声映画という「メディア」自体を「メッセージ」とする仕掛けが生み出されている点を指摘した。

続いて、『百万人の合唱』を取りあげた。本映画ではオーケストラによる物語外の伴奏音楽が全編に付されており、映像上の身振りと正確な同期を行う「ミッキー・マウシング」、登場人物のモチーフ、また「聴覚ディゾルヴ Audio-dissolve (Rick Altman)」など1930年代以降のハリウッドでの常套手段が取り入れられている。一方で、当時の流行歌を多数織り込んだ「物語世界内 (diegetic) 音楽」では、邦楽、和洋合奏、演歌などの様々な折衷の様式が登場する。こうした物語世界内／外の音楽の対比に、標準化への志向と地域的特性の保持という二つの傾向を読み取ることが出来る点を示唆した。

以上の構成で、トーキー技術導入期の技術そのものの強調から、よりハリウッドにおける実践の観点からは「自然な」伴奏音楽へと標準化されていく歴史的傾向を、事例分析を通じて示した。

### 〈質疑、反響と感想〉

質疑応答では、イギリスのサイレント映画期の上映形態を専門に研究する Julie Brown 氏

から、特に物語世界内／外における語法の分化、すなわち物語外音楽において語法の標準化への強い傾向が見られることは、地域を超えた類似性がある点が指摘された。また、発表後の会場内での意見交換で、香港、上海等の事例においても、西洋音楽と地域の音楽の融合や対立など、同時代の作家が共通する問題を抱えていた点を指摘された。その他、他地域を対象とした発表においても、占領期韓国で上映された日本映画における弁士の説明が持つ政治的意義への Kalinak 氏の言及など、日本の事例に関する指摘があり、同時期の実践のなかでの日本の事例の意義を再考する機会となった。

各地域の同時代を対象とした研究で、音楽、映像両面における一次資料収集が最初の大きな課題となる点を共有できたのも貴重であった。日本における映画の音楽に関する資料は、報告者が研究拠点とする東京に限っても、東京国立近代美術館フィルムセンター、早稲田大学演劇博物館、日本近代音楽館、マツダ映画社、各映画会社資料室などに点在しており、全貌が明らかではない。個人蔵の資料も含めた包括的調査の必要性を痛感した。

またサイレントからトーキー映画への移行期という時代的特性もあり、音楽映画を取りあげた発表が多かった。日本での同時期の小唄映画、音楽映画などの研究は、これまでは映画研究の枠で行われることが多かった。当分野の音楽面の分析も今後の課題の一つとなろう。

本会議へは、数年来、報告者が参加してきたドイツ語圏の主要研究グループ・キール映画音楽学会 (<http://www.filmmusik.uni-kiel.de/>) で面識を得た若手研究者も多く発表しており、ヨーロッパ内での情報交換の緊密さを改めて実感した。映画の音楽に関する各国研究者との交流、国内での映画研究者との情報交換を継続し、本奨励金の助成を通して得た経験が今後の日本映画の音楽研究の進展の一助となるよう尽力したい。